

# 大学連携の意義

新堀 通也

しんぼり・みちや

武庫川女子大学教育研究所  
一九二一年兵庫県生まれ

「冬の時代」「氷河期」を迎えて、日本の大学はいかにして生き残るかサバイバルの道を模索しつつある。個々の大学にとっては、学生あつての大学だから、学生、望むらくはいい学生が集まるのかどうか最大の関心事だ。だがサバイバルに懸命なのは大学だけではない。大学以上にあらゆる企業や産業が国内外の競争にさらされ、生き残りに血の出るような努力を払っている。そしてこの生き残り策は大きく三つに分類できるように思われる。

第一は自助とでも称し得るものだ。自由経済、開放経済のもとでパブルがはじけ、円高に苦しむ各企業は、従業員のリストトラ、配転、出向、スリム化、新規採用抑制、合理化、省力化、非採算部門の整理、新製品の開発、経費節減、工場の海外移転など、必死の自助努力をおこなっている。それが学歴主義に代わる能力主義や求人減少などとなって、大学の教育や学生募集にも大きな影響を与えることは、身近に観察される通りだ。

第二の生き残り策は互助である。過当競争のもとでは自助努

力にも限界があるし、競争に敗れた企業はツブれて経済全体を悪化させ社会不安を招く。そこで共存共栄、共生というか、互いに協力、協調、ワークシェアリングによって共倒れを防ぎ、共通の権利や利益を守るため、カルテル、提携、合併、系列、談合、共同受注などの手が打たれる。

第三は公助だ。これには互助的行動の一環である場合もあるし、国の産業育成策、保護政策である場合もある。前者は同種企業の連合組織が団結して政治力を発揮し、共通の利益や権利を公的に保護、支援するよう政府に働きかけるのがその例だし、政府が税制や金融上の優遇策を講じたり、補助金や助成金を与えたりするのが、後者の例だ。

大学の生き残り策もこの三つに大別される。個々の大学が教育と研究の水準を高め、すぐれた学生や研究成果を生み出すことが本道であることは、誰にもわかっている。それが生き残るための競争力であり、この自助努力を新しい設置基準も自己点検、自己評価の名のもとで求めている。

だがこの競争力強化には莫大な費用が要る。大学は企業のようにリストラや海外移転をおこなうわけにはいかない。大学の製品たる学生を企業に売り込んで、その代金を企業からもらうわけではないし、教授が研究成果を上げてても大学の収入になるわけではない。特に公助の主体たる政府というスポンサーや篤志家や卒業生からの寄付金を期待できない私大の安定的収入源は学生（実質的にはその親）が払う受験料、入学金、授業料であり、志願者はともかく学生定員は決まっているので、収入には明らかに限界がある。公助（私学助成）も国家財政の逼迫から頭打ちだ。

そこで考えられるのが互助だ。地域の複数の大学が共用の施設や機構を作って経費の節減や効果の向上を図り、それぞれが得意とするものを互いに融通し合い、役割分担（垂直的分業や水平的分業）のもとで協力する方式が代表で、その典型は米国のコンソシウムである。

大学で教えたり研究したりする分野は拡大、細分化するし、巨大な経費や施設が必要となるため、一つの大学で何もかもまかなうことが次第に不可能となった。そこで、一九二七年、ポモナ・カレッジ学長プレスデルの提唱によって南カリフォルニア・クレアモント・カレッジ群が組織されたが、これが最初のコンソシウムだといわれる。つづいて二九年にはジョージア州のアトランタ大学、モアハウス・カレッジ、スペルマン・カレッジが協

定を結んで、アトランタ大学センターを設立した。この二つの組織を先達としてコンソシウム運動が始まったが、大学の拡張とインフレとが顕著となった六〇年代から七〇年代、運動は最盛期を迎えた。

大きな契機となった出来事は、六二年と六九年二回にわたって、五大湖カレッジ・センター（CCFL）というコンソシウムが主催して開かれたコンソシウムに関する会議である。コンソシアムの代表やフォードなどの財団の代表が一堂に会したこの会議では、大学間連携の分野、組織、財政などが論議され、そのレポートは大きな影響を与えた。

他方、コンソシウム運動を公助の面で刺激したのは、六五年の国会決議と高等教育法によって、大学協力に対する資金援助が保証されたことである。七〇年代にはニューヨーク、イリノイ、コネチカット諸州も州内のコンソシウムに財政支援をおこなうようになった。カーネギー高等教育委員会が七二年に出版した『資源の有効利用』は主として経済的根拠に基づいて、すべての州がコンソシアムの創設発展を支援すべきだと主張した。この書物にも示唆されているが、コンソシウムを完全に諸大学の自主的組織にすべきか（互助）、政府の資金や主導に依存すべきか（公助）、またコンソシウムと個別大学の自治（自助）とをどう調和させるのか、コンソシウムは所期の効果を上げていないという現実や批判にどう答えるかなどの問題は未解決だ。